

第1回市長とG O郷トーク 会議録

団体名	鹿屋青年会議所、鹿屋商工会議所青年部、鹿屋肝属法人会青年部会
日 時	令和8年7月27日（月）15時00分から16時30分まで
場 所	鹿屋市役所 議会棟3階 全員協議会室
参加者	鹿屋青年会議所など3団体 16名
	市長、総合政策部長、産業交流部長、秘書広報課職員

意見交換

- 1 鹿屋市の人口減少と今後の対策について
- 2 文化財等の観光への活用について
- 3 スポーツ振興について（野里運動公園サッカー場の活用について）

【参加者からの主な意見】

1 鹿屋市の人口減少と今後の対策について

- 若者流出も本格的に始まっており、子どもたちがいずれ鹿屋に帰ってくる魅力があればいいと思っている。
- 子どもが一度県外に出て、勤めた会社から交通費が全部出る、家賃も一年間全部出るなどの待遇があった。例えばUターンしてくれた企業へ税制の優遇があり、本人たちに交通費が出るなど、帰ってこさせるきっかけを作ってはどうか。会社で家賃を全部出すのは非常に負担が大きいので行政で何かできないか。
- 3か月くらいで学校や仕事を辞めて引っ越したい若者が多いらしく、6月7月は引っ越し業者が忙しいようで、鹿屋に戻らずに県外で働き出した子がいた。大学、専門学校に行って他所で仕事ではなく、鹿屋で就職しようという方へのサポートも、今後、頭の中に入れていただきたい。
- 子どもたちの出生数が減っていて、不妊治療を受けている方も多い。作りたくてもできない方も結構いて、不妊治療への対策など、色々な要因があるかもしれない。
- 鹿屋市は色んな県内一の支援、制度がある。そのような制度を全然知らず、必要になった時に自分から調べに行き、商工会議所などに手伝っていただいたりして情報をもらっているの、制度が一本化というか、簡単に見える化できれば良いと思う。知らないことが結構あり、その乖離が少しあるかなと思うため、プッシュしてもらいたい。

《市長》

- 昨年の出生数が604名、令和6年が642名、平成29年が1,025名。この7、8年の間で、約400人の出生数が減っている状況で、今年は500人くらいになるかもしれない。人口減少社会をいかにしてクリアしていくのかと、なおかつ人口減少に見合った社会構造にしていくということもまた併せて必要なことだと思う。
- 現在約1,000人の高校生たちが卒業するが、鹿屋に残る人数は大体60人くらいで、940人は市外の大学や短大、あるいは就職している。県の場合は、約6割は県内に残るが、鹿屋市の場合は6%しか残らない状況で、子どもたちがいかにして鹿屋に戻ってきてもらえるのかということは重要なことだと思う。

- 一番の魅力は食だと思う。ないものねだりをするのではなく、あるもの探しをしていきたいと思いますとよく言っているが、強みを伸ばしていくことが一番の勝ちパターンで、食を伸ばしていくことにこそ鹿屋の魅力発信があると思う。
- ばら園はこれまで約35億円の投資がされ、多機能化を図っている。霧島ヶ丘に上があれば、食事もでき、夕方まで遊びきらないような空間を作り、滞在時間を延ばし、夜は鹿屋に泊まってもらい、鹿屋の美味しい食事をしてもらう、交流人口をいかにして形作っていけるのか主要スポットを検討している。要は無い袖は振れないため選択と集中で進めたい。
- 強みを伸ばし、シビックプライドを醸成して、また鹿屋に帰りたいたいと思えるようなまちづくりを進めていかなければいけないと思っている。
- Uターン、Iターンの助成金で1人当たり最大100万円もらえる制度を鹿屋は作っている。あと県の事業もあり、昨年の移住者の数は県内19市の中でも上位で、取組は引き続き行わなければならない。
- 6月に鹿屋市体育館（クレバリーホームアリーナ）で企業説明会を開催して、今年は90社近く出ていただいた。鹿屋にもそれなりの企業があることを高校生の時に認識していただき、挑戦を後押しすることは引き続きしていかなければいけないことだと思う。
- 先日調べたが、10人に1人が不妊治療をしているデータがある。今年度から遠隔地で生殖補助医療を受けている夫婦に対し、1回あたり大体2,000円の補助を出す制度を始めた。半分は国からの公費補助金も入れてだが、年度あたり10回を上限に助成している。
- 結婚していただけたら、生まれる子どもの人数は10年20年前と変わらないというデータもある。出会えて結婚していただけたら子どもの出生数は増えると思う。バーチャルリアリティを使った結婚支援もしているが、市の取組も限界があるため、鹿屋青年会議所など、婚活支援も色々と取り組んでいただけたら、出生数の増加にもつながるのではと、個人的に少し期待している。
- 鹿屋市は福祉、子育て、土木など全600事業ほどある。産業振興の上限150万の部分も先ほど問い合わせたら、まだまだ申込が少ないということであったが、必要とされる方は結構いらっしゃると思うため、色々相談を受けた時はぜひ発信をしていただきたい。
- 「かのやのるーと」というAIデマンド型交通にしても、現時点でも知っている方は上手く活用できているが、知らないとは全然活用されていないという状況があるため、情報の上手い発信、窓口の一本化も進めていくことは重要だと思う。

2 文化財等の観光への活用について

- 日本で一番多くの特攻隊の英霊の皆様が旅立っている鹿屋航空基地史料館を、いかに宣伝していくのか。小学校、中学校合わせて、私は学校の先生に連れて行ってもらったことがない。教育的、道徳的な所でモデル化できれば、精神的にも育まれるのではないかなと思う。
- 文化財や鹿屋市に皆様が知られてないような施設が解体されたりしているものもある。例えば志布志では、石蔵を改修してパン屋にしたりしており、鹿屋市

も文化財保護にもう少し予算を充てて、元々ある伝統的な方法をもとに修繕して観光施設にできればいいと思う。

- 県外からお客さんが来た時に、自衛隊の史料館などを案内している。あとは一番喜ばれるのが、串良の地下の電信室で、時間が許せば、佐多辺塚の自衛隊の演習場、東串良の神武天皇が出発したところ、古墳など大隅半島は本当に歴史遺産がとても豊富だと思う。鹿屋市だけではなく、おおすみ観光未来会議があると思うが、大隅の市長の連携も必要になると思う。
- 史料館の改修プロジェクトの中に私たちの声や鹿屋市の声がどれほど入るのか。旧鹿屋基地から908名飛び立ったということで、あまり派手に観光地化して欲しくないという地元の声もありながら、どのバランスで改修工事を行っていくのかというのは難しいところだ。
- 史料館見学に参加して、ガイドが非常にいい話をしてくれるが、一人のツアーガイドでは行き届かない部分があったように感じた。無線もあつたりもしたが、ガイドの生の音声でA I化したり、色々見やすい形を作っていただければと思う。

《市長》

- 今後10年間で1000億円とも言われる自衛隊の改修工事の一つのスキームの中に、史料館の全面的な改修も入っており、非常に楽しみに思う。また、二式大艇の飛行機も世界に1機しかなく、ゴジラの映画で予告編に出ているということで、それもまた文化財の一つだと思う。
- 大隅の各首長の皆さん方とのネットワークや顔を合わす機会は、想像以上に頻繁にお会いする機会があり、その場で色々とお話をする機会もある。例えば観光のルートを作るなどは、実務者同士の連携や会議が必要だと思うが、課長会議なども観光のDMOの媒介として行われているようである。
- （産業交流部長）DMOで今課題としているのは、テーマで大隅の全部と連携が難しく、例えば鹿屋と垂水など限られてくる。戦跡だけだと全部はつながらないが、つながる所と連携を強化していくことが良いと思うため、戦跡に限らず、スポーツはどこと連携して合宿を誘致するなど、協議を進めているところである。
- 鹿屋の皆さん方でも、青年部にも造詣の深い方がおられるので、そういった意見を反映することができるのかと大西前群司令に当時お伺いしたら、「それはもちろんですよ」と返していただいたのが非常に印象的だった。地元目線の史料館のありようは、当たり前のことなのだとすることを認識して、しっかりと訴えていかないといけないと思う。
- （総合政策部長）改修工事が始まる時点から自衛隊と市で打ち合わせをしており、今の史料館は小さい子どもたち向けの見るものがなかったりするので、何か体験ができるような、アトラクション的なものを入れられないかという意見は出している。併せてそのことについての要望もあげており、自衛隊の方も気をつけていただいていると理解している。

3 スポーツ振興について（野里運動公園サッカー場の活用について）

- サッカー人口は多いので、交流していく上で隣の芝生の広場も改修できないかなと思う。1面だけだとBチームを出したい時に数がこなせないなので、そこで人数が来なかったりする。あともう2面ぐらいできそうな感じもある。
- 今回、鹿屋体育大学出身指導者の学校が集まるフェスティバルで、強豪校の東福岡などが来てくれた。さらに整備されれば、ネットワークも色々な形で交流人口、お金が落ちる仕組みができると思うので、より整備をしていただけるとより呼びやすくなる。
- 体育大生だけではなく、最近では、鹿屋出身でブンデスリーガの選手がいたり、アンダーのジャパンの子がいたりする。施設ももちろんだが、ぜひそういう子たちを増やして、地元でサッカーしても世界に行けるとなったらいい。
- 鹿屋商工会議所青年部のサッカー大会などが頻繁にあるが、昨年も今年も佐賀での開催であった。地元で誘致するにしても、呼べるような場所がないというか、ホテルのこともあったりする。そういった環境が整っていれば、大会を誘致するとかも含めてチャレンジする団体も色々あると思う。
- 例えばラグビーの合宿と言えば、菅平や久住などブランディングがされており、合宿の施設から整備されている。それだけのグラウンドを作ってもう1面欲しいのであれば、長期的な視点でどのような構想を描いていくのか。ブランディングが誘致の一つのツールになると思う。また、選手たちの意見も取りながら整備していただきたい。

《市長》

- 施設整備を通じて、霧島ヶ丘公園などの公共施設に集客、人が来て、夜は街にお金を落としてもらう、税収で還元してもらうのがあるべきサイクルだろうと思う。野里のサッカー場は活用頻度が多く、土日には昼間から色々な大会で子どもたちが駆け回っている姿を見ると、大成功事例だと思う。
- 去年の11月からオープンしてもうすぐ一年が経つので、そこで改めて評価して、次なる手を打つにあたっては、来客が見込まれるなど整理をしていかないといけない部分だと思う。地元との調整などを踏まえ、丁寧に進めていきたい。もう1面、もう2面作ることは大きな方向性の一つかと思う。
- 鹿屋のスポーツ協会に所属している団体が35団体くらいあり、各団体から色々な要望がある。公平性も大事だと思うが、一つとがった、振り切ったものの一つがサッカー場の整備もあるのかなというふうに思う。
- 短期的なスパンではなく、10年後、20年後ブランディング化される、スポーツの合宿を呼び込めるような姿も考えていきたい。
- 今年4月にスポーツ推進計画が整理され、する、見る、支える、つながるスポーツというのは計画で出ているので、ホームページで是非ご覧いただきたい。その中でも、令和11年には10万人の合宿者を呼び込む目標値も設定されているので、それに向けて色々努力していかなければならない。

【閉会あいさつ】

《市長》

- 「鹿屋は何もないよね。あそこにはあれがあるけど、鹿屋は遊ぶものがない。」と言われることも多い。考えてみると、自然、食が豊富で、スポーツの色々な施設、あるいは文化的な施設、交通も少ないといった条件で、自分たちの遊ぶ技術、あるいはその中で色々なものを見出せる技術が、実は市民一人一人、我々にも求められると思う。
- 自転車にしても、堤防沿いを行ったりすると、それだけで非常に爽快な気分になるし、古墳巡り、あるいは串良に行けばプールがあり、霧島ヶ丘公園に行けば楽しめるスポットもある。遊ぶ技術を自分たちも高めていくということが、実は豊かな人生、豊かな毎日を送る上では、非常に大切なヒントになると思う。その後ろ姿を見る子どもたちが、また遊ぶ技術が豊富になり「この地域に住むことって実は楽しい」となると思う。
- 行政がすべきこと、各種団体がすべきこと、そして我が社ですべきことと、自助、共助、公助とある。行政も無い袖は振れないし、限られた財源の中で、皆様方からお預かりする大切な税金を的確に、公平に、かつ公正に投じていかないといけないという制限がある中で、1400人の職員と英知を振り絞っていきながら、我々一人ひとは遊ぶ技術、生活に潤いをもたらすような技術、その車の両輪でさらに魅力あふれる我々であらなければならない。それが、より魅力あふれる地域につながると思う。